

「2. 軽度発達障害への教育現場の取り組み -コミュニケーションを中心に-」

多摩市教育委員会指導室 言語聴覚士・臨床心理士・特別支援教育士スーパーバイザー

長岡 恵理(ながおか えり)



● 略歴

1978 年 早稲田大学法学部卒業

1979 年 国立聴力言語障害センター附属

聴能言語専門職員養成所卒業

1996 年 白百合女子大学大学院文学研究科（発達心理学専攻）

修士課程修了

多摩市教育委員会指導室（巡回相談員）、
多摩市通級学級（スーパーバイザー）、
早稲田大学総合健康教育センター学生相談室、
立川市保育課（巡回相談員）などに勤務。

教育界は今、平成の大改革ともいわれる「特殊教育」から「特別支援教育」への転換期を迎えている。「特別支援教育」の基本理念は、「障害を持つ子ども達一人一人の教育的ニーズを把握し適切な指導等を行うことにより、自立や社会参加に向けた主体的取り組みを支援する」ことにある。演者はこの動向を受けて学校への巡回相談を担当しているが、現場で中心的な問題になるのは「コミュニケーション」である。「集団不適応」「授業妨害」「学力不振」「不登校」「いじめ」「学級崩壊」など、現在学校教育が抱える多様な課題の背景に、コミュニケーションの問題が潜んでいる。しかし「コミュニケーション」は日常的な用語である故に、かえってその概念は漠然としており、取り立てて考える機会も乏しい。そこで本講演では、まずコミュニケーションをいくつかの観点から整理し、「なぜコミュニケーションはズレるのか」を考えてみたい。

我々はコミュニケーションなくしては生きられない。「無言」「無視」はコミュニケーションの不在ではない。「情報を与えない」「反応しない」という態度は、言語としての情報は与えなくても、「情報を与えない」という行為自体が強力なメッセージを発信している。人の全ての行為、存在自体が何らかの影響を相手に与えるのである。人間関係は「発信者のことばや態度が受信者にどのように受け取られ、それを発信者がどのように受け取ったか」の連鎖から生まれる。この連鎖が問題を作り、あるいは解決していく。コミュニケーションにおいて「意味」は、発信者が「伝えたつもりの情報」にあるのではなく、受信者が「実際に受け取った情報と影響」の中にある。コミュニケーションは本来的にズレるものなのである。

ガードナー（1983）は人生に有用な知性は大別しても、学力に相当する「言語的知性」「論理数学的知性」、芸術家や建築家が示す「空間的知性」、運動選手が示す「身体運動的知性」、音楽家が示

す「音楽的知性」、そして人格的知性を構成する「対人知性」と「心内知性」の7種類ある、として「知性の多重性」を提唱した。「対人知性」とは他人を理解する能力であり、その本質は「他者の気分、気質、動機、欲求を識別し、それに適切に対応する能力」とされる。「心内知性」とは自分の内面に向けられる知性であり、「自分の感情に気づき、弁別し、行動指針とする能力」を含むとされる。真意が相手に伝わるように情報を発信し、また受信した情報から発信者の真意を読み解くためには、「対人知性」「心内知性」が必要になる。

「通じ合えない」関係を生み出す代表的な障害がアスペルガー症候群である。彼らはガードナーが言う「対人知性」と「心内知性」が自然には育ちにくい困難を抱えている。どうすれば自分の内面を洞察し、他者の内面を理解し、互いの事情に折り合いをつけていくのかを丁寧に教えてもらうニーズを持つ人達である。彼らに対して、私達は一体どのようにして、共に心地よく生活していく方法を教えることができるのだろうか？人間関係から生じる問題の原因は、誰か一人に帰することはできない。互いの違いや避けられないズレを認め、理解し合う意欲を維持し、歩み寄る意志を持たなければ解決し得ない。価値観が多様化・個別化し、暗黙に共有された常識や良識が曖昧になった昨今、コミュニケーションのズレへの感度を育て、ズレから生じる弊害を防ぐためのコミュニケーション能力を高めることの重要性は、誰しもが痛感しているのではないだろうか。本講演がこの課題に取り組む上で小さなヒントになれば幸いである。

【MEMO】